沖縄の旬な情報と人をご紹介するラジオ番組のフリーペーパー
paperRADIO
Free

ハイサイ！ウチナ〜タイム！

No,26
5月
2018

平川美香

アーティスト

【第 313 回】スタジオゲスト
5月2日(水) 再放送5日(土)

平川 美香 ひらかわ みか 出身地：沖縄県うるま市

幼少期から音楽に興味があり、中学時代には従兄弟の仲宗根泉（現HY）と供にバンドを結成。高校を卒業後、高校教師になるが夢を諦めきれず上京。
しかし結果を出せず挫折を繰り返す。
諦めて沖縄に帰ろうとしていた時に療養中の友達から１本の電話。
「みーかー歌って、みーかーの歌を聴くと元気になれるから」
冷たい携帯越しに泣きながら歌った。
誰かが元気になれるなら、１人でも笑顔になってくれるなら、何よりも好きな歌を歌い続けよう。まわりからどう思われようが関係ない。
沖縄で自由気ままに生きるおじさんのように・・・。

そんななか生まれた平川のおじさんやレディーブブのキャラクターが注目を浴び、
フジテレビ「アウト×デラックス」などに出演。
自身が初の作詞作曲を手がけた「想い唄」は多くの人々から共感を得て、
YouTubeでは１週間で１万回もの再生回数を伸ばした。

その姿からは予測できない歌声とパワフルなダンスをご覧あれ！

平川のおじさんです。
平川美香

平川のおじさんです。
平川美香

沖縄出身の NEW DIVA!?
平川美香が放つこの１枚 ‼

島袋優 (BEGIN)、前川真悟（かりゆし 58)、ポカ＝ユイチン（ポニーテールリボンズ）など沖縄の J-POP を牽引してきた才能もクリエイターとして集結 ‼

収録曲

1. 平川のおじサンバ
2. 天使にデブソングを
3. 泣いて笑って
4. 笑顔になるその日まで
5. 夕日
6. ネゴエゴ
7.Me がみーかー
8. 想い唄

2018.4.11 Release　￥2,000（税込）

ラジオの聞き方

スマートフォンで聴く場合、アプリは不要！！
パソコンと同じ URL をスマホからアクセスするだけで聴けます。
https://fm-odawara.com

毎週水曜 19:00〜20:00　再放送 毎週土曜 18:00〜19:00

ハイサイ！ウチナ〜タイム！　**FM おだわら** で検索！

78.7MHz FMおだわら
http://fm-odawara.com/

BASKETBALL
PERFORMER
JJ

RPC エンタメ通信 vol.14

RPC＝琉球パフォーマンスコネクション

少しずつ春から夏へと変わりつつある中、わたくしＪＪも今年は大きく動く１年になりそうです。また追って報告しますが、やっぱり1度きりの人生、やれる環境にあるなら思い切り突き抜けていきたいですね！と、意味深な文章から始まった14回目のエンタメ通信。笑

今回はちょっと予言的な内容にしてみたいと思います。この文章も意味深。笑

沖縄県内でパフォーマンスエンターテイメントを広めたいと活動している中で、僕が思うに沖縄で大きなイベントといえば「祭り」なんですね。その中でも「那覇祭り」や「オリオンビアフェスト」は沖縄の２大イベント。

自分も祭りが好きなので時間があれば遊びに行って仲間とビールとステージと、その空気を楽しんでいるわけなんです。

そして毎回祭りのステージを見て思うのが…、このステージにパフォーマンスの時間を作りたい。パフォーマーが毎回祭りのステージに立てる環境を作りたい。

ライブはもちろん盛り上がりますが、我々パフォーマーのパフォーマンスも負けていないと思っていますし、そのステージにパフォーマーが立てるようになれば、パフォーマーの評価も上がり地位も上がる。そういった好循環を作ることが出来ると考えています。

そこで琉球パフォーマーズコネクションを立ち上げた時から、ＲＰＣしか出来ないステージを意識して活動してきました。

そしてチャンスが来たのは今年1月。オリオンビールのイベントに関われるチャンスをもらい、この時は県外からストリートパフォーマーを３名招聘して「沖縄ＶＳ日本」という構図のストリートパフォーマンスエキシビジョンバトルを実施。天候に恵まれなかったものの面白いショーを演出しました。

そして、先月は「オリオンサザンスターブルームーブメント」でオファーを頂き、県内の異なるジャンルのパフォーマーを集め30分のショーを構成し、かなりの盛り上がりでイベントに華を添えることが出来ました。

さあ、ここからです。今年のオリオンビアフェストは９月に開催予定。近い将来、我々が「祭り」のステージに立てることが出来るか、注目しててください。

意志あるところに道は拓ける。自分なりに表現してみたいと思います。

BASKETBALL
PERFORMER
JJ

たるーの島唄コラム

第十四回　シマウタと色

私たちが沖縄で出会う色彩の豊かさは沖縄のたくさんの魅力のうちの一つだろう。年中いろんな花が咲き、海や空の色はため息をつくほど美しい。そして時間とともに色も変化する。首里城や紅型の色もまた見事だ。当然沖縄の人々のウタにもその豊かな「色」が取り入れられている。今回はその色のあれこれを見てみたい。

若松の緑 床の前に飾て 枝見れば銀 梢
や黄金

若い松の生き生きとした緑を家に飾り、その枝を見れば銀、梢は黄金のように輝いて見える。松は冬も緑を保ち、その枝を広げて茂るから永遠と繁栄の象徴だ。その祝いの席で歌われる「鶴亀節」には「緑」、「銀」と「黄金」など、おめでたい色を盛り込むことでウタに言霊(ことだま)のパワーを注ぐ。

諸鈍美童の雪色の歯ぐき 何時が夜の暮
れて御口吸わな

諸鈍は奄美大島の村。雪は滅多に降らないのだが、美しい娘の歯を「雪色」に例えて、夜が暮れたらいつか自分の唇を重ねたい、と憧れている。何にも染まっていないことを真白な色に例える。「諸鈍節」という古典曲。

色っぽいウタには当然「色」が出てくる。士族と遊女のやりとりをシットリと唄う「西武門節」では着物の色だ。

片袖や紺地　片袖や浅地ヨ　何時が
むる染めの　紺地着ゆら

ねえ私の着物は紺地だけど片方の袖は色が薄い浅地なの。いつ両方の袖を紺地にしてくれるのかしら？

「いつ結婚するのかはっきりしてよ！」などと野暮は言わない。着物の紺地は琉球の士族の妻の「制服」のような色だ。いつ紺地にしてくれるの？と説得力はマックスだ。すると男が答える。

思い羽の契り　変わりねんごとにヨ
染めて呉いら無蔵よ　紺地色にヨ
ーテ　染めなち呉りよや　我ん思や

お互いの愛が変わらないように、かならず紺地に染めてあげるよ 私の愛しい人よ。なんて答えると女は畳み掛けるようにこう切り替えす。

染みゆらば里前　くがらしぬぐとに
浅地どんやりば　ゆるちたぼり

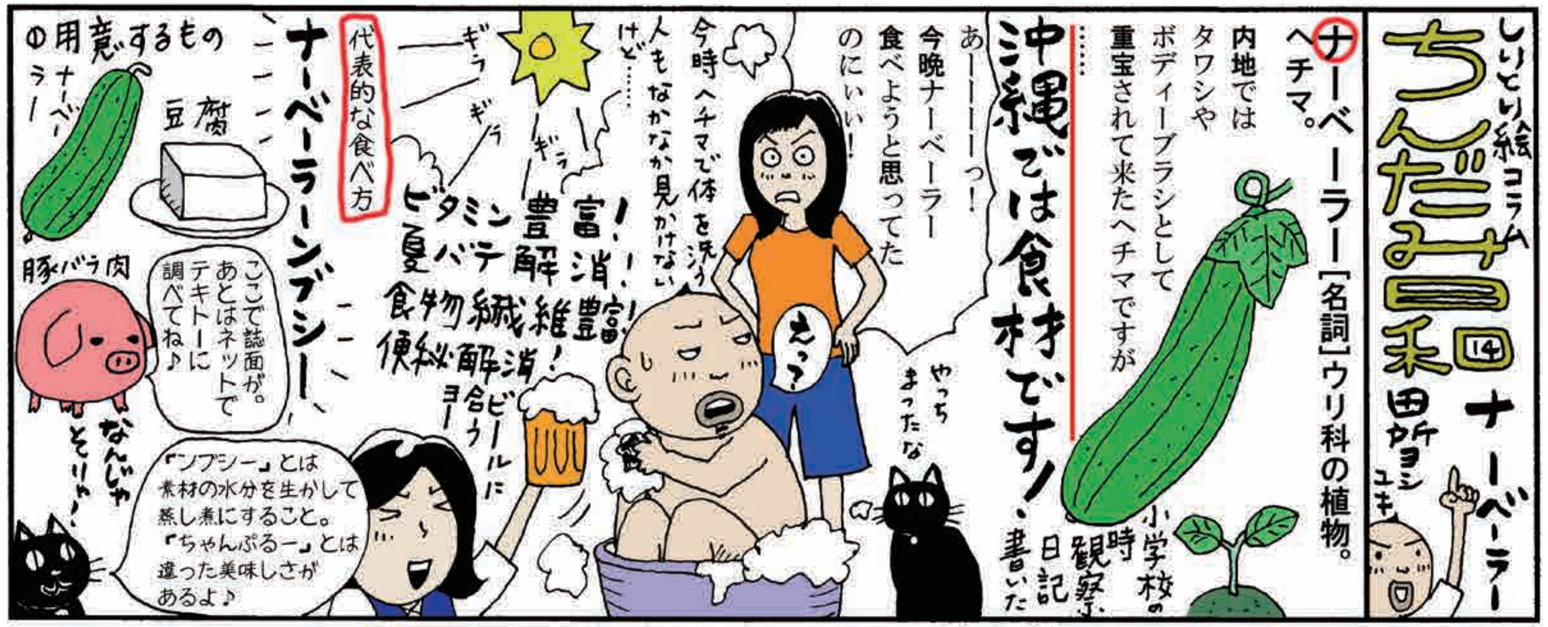
染めるんだったら貴方、小カラスの羽の色のように濃い色（黒に近い紺）にしてね、薄い色ならご遠慮申し上げます。男はもはや心に固く鍵をかけられてしまったようなものだ。

染色、機織などが女性の仕事の多くをしめていた琉球で「色に染める」というのは「想いに染める」ということだった。

色も多様だ。若さや繁栄を求めるなら緑や金銀。まだ人に染まらない娘の心は真白。色自体が人々の愛情や願いとなってシマウタで唄われることで豊かな価値を生み出している。色は沖縄の人々の暮らしには欠かせない貴重な「資源」なのかもしれない。資源の無い私たち島国ではこういう価値の創造が大切なんだ、と教えている気がしてならない。

たるー（関 洋）

宮崎県生まれ。広島在住。琉球民謡協会教師。ネットでおなじみの「たるーの島唄まじめな研究」の著者。島唄の訳と解説をして10年！ 広島で三線教室や「YOU 果報バンド」を主宰。


しりとり絵コラム
ちんだみ日和⑭
田所ヨシユキ
ナーベーラー
ナーベーラー【名詞】ウリ科の植物。ヘチマ。
内地ではタワシやボディーブラシとして重宝されて来たヘチマですが……
沖縄では食材です！
小学校の時観察日記書いた
やっちまったな
あーーーーっ！
今晩ナーベーラー食べようと思ってたのにぃぃ！
えっ？
今時ヘチマで体を洗う人もなかなか見かけないけど……
ギラ
ギラ
ギラ
ビタミン豊富！
夏バテ解消！
食物繊維豊富！
便秘解消！
ビールに合うヨー
代表的な食べ方
ナーベーラーンブシー
①用意するもの
ナーベーラー
豆腐
豚バラ肉
ここで誌面が。あとはネットでテキトーに調べてね♪
「ンブシー」とは素材の水分を生かして蒸し煮にすること。「ちゃんぷるー」とは違った美味しさがあるよ♪
なんじゃそりゃ！

また、ヤールーが笑っている。

大城密

第8話　那覇ハーリー

おおしろひそか　那覇市出身、東京都在住。「スマホ小説大賞 2014」にて『私アプリ』が角川ホラー文庫賞を受賞。「第２回ノベリスタ大賞にて『EGGMAN』が準大賞を受賞。2017 年『下町アパートのふしぎ管理人』シリーズが角川文庫より刊行されている。

ゴールデンウィークに沖縄に帰省するのは何年ぶりだろうか。連休は取れるけど飛行機代の高さでいつも二の足を踏んでしまう。だけど、今年は違う。三年間も遠距離恋愛をしている和志が飛行機のチケットを取ってくれたのだ。

あまりお金に余裕のない和志にしては珍しいことだと思ったけど、ゴールデンウィークに開催される、那覇ハーリーに参加するということで是非見に来てほしいとお願いされた。

『ハーリー』とは爬龍船と呼ばれる、龍を模した長いカヌーのような船を使って行われるレースである。確か船の漕ぎ手は三十人ほどいたと記憶していた。さらにそれに加え、舵取りが二名と鐘打ちが二名いて、総勢四十人ほどが乗り込む迫力のあるレースだ。

特に那覇で行われるハーリーはその規模も参加するチームも多く、子供のころはよく家族と見にきていた。

というわけで私は今、那覇ハーリーが行われる会場である那覇新港埠頭に来ていた。久しぶりに浴びる沖縄の強烈な日差しで、日々の美白への努力が一気に吹き飛んでしまいそうな気がする。

大きなイベントなので会場には食べ物の出店も人も多い。メインのハーリー以外にも様々なプログラムが行われており、会場のどこも賑わっている。

私はオリオンの生ビールを購入してから和志を探した。

和志が参加しているハーリーチームは、地元の同級生で組まれたチームだった。

私は和志と地元も一緒なのでそのチームにいるであろう、懐かしい顔ぶれと会えるのも楽しみの一つだった。

参加者たちが準備をするエリアで真っ赤なお揃いのTシャツを着ている集団を見つけた。私の地元の名前がチーム名に入っている、間違いなく和志のいるチームだ。

「おー！　美由紀！」

私がきょろきょろしていると、同級生の一人が私の名を呼んだ。彼の後ろにも知っている同級生の顔が見えた。皆が白い歯を見せて私に手を振り、歓迎してくれた。

私を最初に見つけた同級生が「ちょっと待ってろ」というジェスチャーをし、彼は和志を呼んできてくれた。

皆の冷やかしの中、真っ黒に日に焼けた和志が現れた。

お互いの画像のやりとりはしていたが、実際に会うのは半年以上ぶりだった。

練習の成果なのか、体が少し引き締まっていて、少し出始めていたお腹も目立たなくなっていた。

「美由紀、空港まで迎えに行けなくてごめん。早朝から準備があったからさぁ」

和志はそう言って笑った。

「別に大丈夫だけど。でも前日とかその前のチケット取ってくれても、良かったんじゃない？　そしたらき今日もこんなに慌てないでこられたのに」

私は再会の喜びもほどほどにずっと疑問に思っていた愚痴を口にしてしまった。

「だっからよー。俺アホだからよ、美由紀にハーリー見て欲し過ぎて、今日のチケット取ってしまったわけよ」

和志は笑ったが、私はあまり笑えなかった。彼には昔からそういうところがあった。思い込みが激しく間違いに気づくのが遅い。

和志が運転免許を取り、親の車を借りて初めてのデートをしようとときも、私の親の車を借りられると思い込んで、私の家まで自転車で登場した。自分から誘ってきたのにも関わらずだ。

それに本当は和志も東京の会社に就職するのが希望だったのだ。だけど和志が就職した会社は沖縄県内の会社だった。「東京での研修期間がある」という募集要項を見て勝手に東京に支社があると思い込んだのが理由だった。結局、その会社で必要な技術の研修も和志が就職した年からは大阪で行われることになり、私が楽しみにしていた東京での再会もなくなってしまった。

「――なあ、美由紀聞いてる？」

気づくと和志の顔が私の目の前にあった。同時に過去の思い出が暑さに溶けた。

「あ、ごめん。何？」

和志がチームの仲間の方をちらちら見ながら、何か言いたげな表情をしていた。

仲間の方も私の方を見ないふりをしながらも、気にしているようだ。

「美由紀、このハーリーの大会で俺たちのチームが勝ったら、俺と結婚してくれるか？」

「……はい？　結婚？」

突然の申し出に私は動揺してしまった。

「ああ、勝ったらもう一度ちゃんとプロポーズするけど」

和志は照れながらそう言った。

「結婚か……。じゃ私とあなたの運命はハーリーにかかってるんだ。漕ぐのにも気合いが入るね」

「ああ、でも俺は漕ぎ手じゃないよ。鐘打ちやるわけさ」

私は耳を疑った。確か鐘打ちとは、漕ぎ手のリズムを合わせるために鐘を鳴らすのが役目だ。確かに重要な役目ではあるが、自分の未来を決めるレースで自分が漕がないとは、私には信じられなかった。

「だからちゃんと応援してよ！」

和志は仲間が待つ場所へと戻った。仲間からは冷やかすような声援が飛んでいる。皆、和志が私にプロポーズすることを知っているのだろう。

しかし、和志は私が応援するということは、そのままプロポーズを了承するという意味になるということに気づいているのだろうか？

私はぬるくなってしまったビールを一気に飲み干した。

三十分ほどして和志のいる地元チームのハーリーが始まる時間になった。皆はハーリーに乗り込む前に気合いを入れるため掛け声を上げていた。

私の手には四杯目の生ビール。海の上には三隻の爬龍船が浮かんでいる。

スタートの合図が鳴った。会場から歓声が上がる。海からは飛沫が上がった。

私は生ビールを飲み干し、海に背を向けた。

ハーリーの勝負結果はどうでもよかった。また和志は勘違いをしている。

私は今日、和志にちゃんと会って別れを告げるためにここまで来たのだ。

本当はここに来ることに悩む自分もいたが、来て正解だった。自分の運命を人の漕ぐ船に委ねる男となど結婚できない。しかも勝ち負けで決めるなんて、嬉しくもなんともない。

私は一杯になったゴミ箱に空になったカップを投げ入れた。

いくら勘違いが多い和志でもプロポーズする相手がいなくなったら、自分がフラれたことに気づくだろう。

いや、それにも気付けないのが和志なのだが、そんな彼を私はもう好きじゃない。

沖縄をテーマとした3分で読める読み切り超短編小説シリーズ。次回は『慰霊の日』。お楽しみに！